

はかる。

はかる。

真塚なつき

はかる。

前方一時、右におよそ三十度といつたところ。だいたい三メートルかしら。これがわたしと貴方の距離なんだわ。鉛筆で貫いた三角定規をくるくる回しながら弄ぶ。

時々尖った先がかすつて痛い。貴方はお友達と楽しそうにおしゃべりしている。たぶん昨日のプロ野球の試合のこと。わたしはルールは全然知らないけれど、貴方の好

はかる。

きな選手が活躍していたのはちゃんと見ていた。背番号
は三番だった。三振と、四球と、死球だった。選手の名
前はなんだつたかしら？

三メートル。

こんなにも近くにいるのに貴方はわたしに気づきもし
ない。こんなに貴方を見つめているのに。こんなに貴方
のことを見つて、数えて、考えているのに。貴方は振り
向いてくれやしない。野球の話ができるから？ だつ
たらちやんと野球のルールを覚えるわ。選手だつて背番
号だけじやなくて、顔も名前もちやんと覚えるから。だ

はかる。

からもつと距離を詰めてよ。

……いいえ全部ウソ。わたしは心のうちで溜息を一つ。
貴方がわたしに気づかないのは当たり前だわ。だつて一度も、話したことさえないのでだから。

この三十三人の教室で男子は十五人、そのうちの一人があなた。

女子は十八人、そのうちの一人がわたし。

わたしにとつて貴方はたつた一人なのに、貴方にとつてのわたしはたつた十八分の一なのだから。

ああ、なんでこの年頃はみんな、男の子も女の子もこ

はかる。

んなに面倒臭いのだろう。ちよつと話しかけるだけなのに、しちやいけないこととしなくちやいけないことが数えきれないくらい多すぎる。溜息をもう一つ。距離は、ほんとうは三メートルでは全然済まないのでしようね。そう思うと溜息が止まらない。いいの、わたしはじつとしていよう。貴方を見ていられさえすれば、知られていなくとも幸せなはずだから。わたしは三角定規をくるくる回す。溜息をもう一つ。尖った先が刺さつて痛い。

貴方は友達と歩き出す。何の気なしにわたしの方へ。そうね、そこが近道だから。でもわたしは黙つていよう。

はかる。

黙つてうつむいたふりして三角定規をくるくる回す。尖つた先は机にぶつかる。三角定規はぶつかつて止まる。

机と机の間を縫つて、貴方はどんどん近づいてくる。わたしの横を通り過ぎる。それでもわたしはじつとしていよう。貴方にとって、わたしは知らない女の子。だけど私は――

ガタリと机がおののいた。貴方の足がぶつかつたのだ。私は思わず顔を上げる。しまつたと思う一瞬もない。

瞳が逢つちやつた。

「あ、悪い――」

はかる。

そして、貴方ははわたしの名を呼ぶ。

——呼ん、だ？

いま、わたしの名前呼んだの？

わたしのこと、知つてるの？

わたし背番号ないのに？

「そりやあ、それくらいは

「どのくらい！」

勢いあまつて、われしらず手にした三角定規を突き付けていた。

貴方は一瞬うろたえる。変な女と思つたかしら。

はかる。

「……少なくともそんなちつちええ定規よりはな
つまらなそうに言い捨てて、不貞腐れたようにふいと
そっぽを向くと、貴方は友達を追いかける。また距離が
開く。もうだいぶ先、十メートルくらい。さっきまでよ
りもずっと遠い。

だけどどうやら、わたしはばかり違えてたようね。

ちつちええ定規を投げ捨てて、わたしも慌てて貴方を追
つた。